

たねまきアクア

⑧KCUAとその周辺に広がる
創造活動の現在形

01

京都市立芸術大学ギャラリー⑧KCUA

ZINE

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA とは

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA は、2010 年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読みするとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約 20 本の展覧会を開催しています。そのほか、2013 年より文化庁委託事業「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として「アーティストの招聘」による多角的なワークショップなどを通じた新進芸術家育成事業」を、また 2014 年より大学移転プロジェクト「still moving」を崇仁地域にて展開するなど、展覧会だけでなくとどまらず、多岐にわたる活動を実施しています。

COVER PHOTO:

INA & MATT ワークショップ“Happy Weeds!”

京都市立芸術大学移転プロジェクト「still moving」

(2015.3.7-5.10 / PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015 特別連携プログラム) の関連イベントとして、

オランダのデザインデュオ「INA & MATT」を講師に迎え、京都市立芸術大学の移転予定地である崇仁地域にて実施。ワークショップの最後には、崇仁地域の空地がマリーゴールドの花でいっぱいになるように願いを込めて、種をまいた。

photo: Hideaki HAMADA (cover, backcover, p.02)

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA ZINE

たねまきアクア

01

Contents

4-13 ARTIST WORKSHOP @KCUA 2015

1. Deep affection for a feather — ネリー・ソニエ
2. House of Day, House of Night — パヴェウ・アルトハメル + アルトゥル・ジミエフスキ
3. DAY 1 at Guido's studio — グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ

14-15 REPORT @KCUA 「月が水面にゆれるとき」

16-17 SCHEDULE @KCUA

18-19 VOICE @KCUA_vol.1 — 鷺田清一「作品のプレゼンテーション？」

20-23 STUDIO VISIT @KCUA_vol.1 — カワイオカムラ「亀岡スタジオ」

たねまきアクア

たねまきアクアは、@KCUA とその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。

(不定期発行、無料)

Artist Workshop @KCUA 2015

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA では、2013 年度より文化庁委託事業として、国内外の第一線で活躍するアーティストを講師として招聘し、大学院生及び若手芸術家とのワークショップ・レクチャーなどを実施する若手芸術家育成プログラムを実施してきました。3 年目となる今年度は、ネリー・ソニエ（羽根細工／フランス）、パヴェウ・アルトハメル＋アルトゥル・ジミェフスキ（映像・インスタレーション・パフォーマンス／ポーランド）、グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ（映像／オランダ）の 3 組の講師を招聘します。

* 過去の招聘アーティスト：山出淳也（美術／日本）、アビチャップン・ウィーラセタクン（映画・美術／タイ）、ウティット・ヘーナムーン（小説・美術／タイ）、エレン・アルトフェスト（画家／アメリカ）、川内倫子（写真／日本）、ラッキードラゴンズ（コミュニケーションアート／アメリカ）



1. Deep affection for a feather — ネリー・ソニエ

Text: Momoko YOSHIDA



ABOUT THE ARTIST

普段は10代の子供たちに羽根細工を教えているというネリー・ソニエ氏はとても気さくで、フランス語の通訳の方を通さずにも伝わるように、擬音やジェスチャーを交えながら説明してくださるのが印象的。参加者に羽根の持ち方やハサミの使い方など手元の細かな動きを教える際は、ネリー氏が参加者の背後から手を取り、丁寧にアドバイスをしながら進めていきます。実践的な内容に重点を置いたレクチャーからは、何よりも羽根細工に対する熱い思いが感じられました。「羽根というのは鳥から抜け落ちて捨てられてしまえばゴミになるけれど、それを集めて美しいアート作品にすればまた新たに価値が生まれて素材を生まれ変わらせることができるのよ」という言葉は彼女の作

品を象徴しているのではないのでしょうか。今回が初来日となったネリー氏はフランスでの慌ただしい日常を離れてのんびりとした時間を満喫し、また北野天満宮の骨董市に出かけるなど珍しい日本の文化を楽しんでいるようでした。

ネリー・ソニエ (Nelly Saunie, フランス)

パリ在住。14 才から羽根細工を始める。オリヴィエ・ド・セール学院（国立応用芸術工芸高等学院）卒業。これまでコラボレーションしたファッションデザイナーに、ジャン＝ポール・ゴルティエ、ニナ・リッチのオリヴィエ・ティスケンス、ジバンシィのリカルド・ティッシ、ジャン・シャルル・ド・カステルバジャック、パコ・ラバンヌやジェローム・ドレフュス等がいる。

ワークショップ参加者

安藤隆一郎（染織）、石塚源太（漆工）、河野愛（染織）、藤井桃子（版画）、道廣明日香（染織）、むらたちひろ（染織）

FEATHER WORKSHOP

ネリー・ソニエ氏による羽根細工のワークショップ「Feather」は2015年4月20日から4月25日までの6日間にわたって行われました。あらかじめ参加者に課題として与えられていたのは自然界にある「whirl（ぐるぐる回るという意味）」のイメージをできるだけたくさん集めるということ。「whirl」から連想される渦のモチーフがワークショップ中の作品制作のテーマとなりました。

まずは羽根の各部分の名称や羽根細工の構想図を描くための言語（羽根は矢印を使って表す）、そして基本的な羽根や道具の扱い方、羽根細工の歴史を学びます。特に興味深かったのは、羽根の芯部、羽根先など各部分を指し示すための細々とした用語がフランス語にはあり、それらに対応する日本語が見つからないということ。フランスの文化に深く根付いた羽根細工のあり方が、フランス語という言語にも表れているのだと実感できる



オリジナルで作られた特殊な形の水蒸気鍋。
ネリー氏がこのためにフランスから持参した。

瞬間でした。またひときわ印象的な行程に、特殊な形の鍋で水蒸気を起こし、その上に羽根を翳して張りを持たせるという、羽根の下準備があります。これは鳥が実際に羽根を整えるためにする水浴びと天日干しという行為からヒントを得ているのだそう。羽根が鳥に由来する以上、その本来のあり方に敬意を払うのです。実際に羽根を注意深く見てみると羽毛の一本一本が非常に有機的な弾力を持っているのがわかり、それがもともと生き物の一部だったのだということを実感できました。

羽根細工の概略の後は羽根を切る、貼り付ける、固定する、

といった実践的な工程の習得に入ります。非常に繊細な羽根の扱いに、さっそく音を上げる参加者も…。ワークショップ参加者のバックグラウンドは様々で、染織専攻出身者が4名、版画と漆工専攻の出身者が各1名。自身の制作で羽根を素材として扱っている人はいませんでしたが、常々制作において「素材」そのものと深く向き合う機会が多いため、彼らにとって、羽根という新しい素材に取り組むことはとても新鮮で刺激的な経験になりました。ネリー氏の素材の扱い方や熟練した手業を、自身の普段の制作と比較して学ぶことができました。

基本的な動作を一通り習得した後は、それぞれの選んだ「whirl」のモチーフの作品化に取り掛かります。イメージをうまく造形に結びつけるためにネリー氏にアドバイスを仰ぎながら、黙々と作業をする時間が続きました。ワークショップの途中でネリー氏が「サプライズがある」と言って大きな袋から取り出したのは、なんと雉の羽を皮ごと一羽分まるまる剥いで保存してあるもの！羽根細工の制作で扱っている一本ずつの羽根も元々は鳥の身体の一部として機能していたもので、気をつけて見てみると各部位の異なる質感や構造の違いなどたくさんの発見が。ここでもまたネリー氏の羽根に対する愛着、素材に対する敬意が垣間見えます。ワークショップの最後には各自制作した作品の講評を全員で行い、2016年1月に控える成果発表展に向けて反省点や発展させるべき点が話し合われ、濃密なワークショップは終了したのでした。



AFTER THE WORKSHOP

ワークショップが終わった後も、参加者は展示に向けて作品制作を行いつつ、メールでネリー氏との往復書簡を通して対話を続けています。具体的な作品の構想を相談したり、ネリー氏自身の制作について質問があったりと内容は様々。また制作の材料となる羽根の収集も重要な工程のひとつなので、各々動物園や鶏料理屋さんと交渉しながら準備を進めています。ネリー氏が2015年9月からレジデンスでヴィラ九条山に滞在する関係で、10月には尾道市立美術館の展示にワークショップ参加者の作品も出展されました。また2016年1月にはギャラリー@KCUAにて成果発表展が開催されます。約9ヶ月にも及ぶセッションを経て、より、自由に発想された羽根細工作品にご期待ください。

EXHIBITION

「オノミチ・ランデブー」尾道市立美術館

2015年10月10日（土）～11月23日（月・祝）

ARTIST WORKSHOP @KCUA 成果発表展「Feather」

2016年1月16日（土）～2月7日（日）

2. House of Day, House of Night (昼の家、夜の家)

——パヴェウ・アルトハメル + アルトゥル・ジミェフスキ



08

パヴェウ・アルトハメルとアルトゥル・ジミェフスキから、まだ見ぬワークショップの参加者に宛てた挑戦状が届いたのは、2015年の春頃のことでした。

——日本芸術の強力な伝統（その完成度の高さ、ミニマリズム、工芸との関連）の力は、日本の芸術家にとって、自己を解放しようとする妨げとなっている。これに対して、ヨーロッパの現代芸術では、その伝統をうまく否定することに成功し、特に芸術教育の場において、手技の能力や職人の完璧さといったものは重視されなくなっている。その結果、ヨーロッパの芸術家たちは、ある意味無知である。

このワークショップでは、言葉によらず、視覚に訴えることで、このような正反対の2つの立場の対話を行いたい。両グループは、自分たちの立場からの意見を自由に表明できる。対話は抽象的なものではなく、それぞれ表明された意見に対して、相手はコメントする。その結果、お互いの意見からさらに新たな意見が生まれるという「意見の連鎖」が生まれる。ゲームのように、同じところをグルグル回りながら。手段は選ばない。よって私たちは伝統について話し合いながらも、議論は非常に前衛的になり得る。そしてそれは、非常にエキサイティングなものになると信じている。

09

Text: Mizuho FUJITA

パヴェウ・アルトハメル Paweł Althamer

彫刻家、パフォーマンス、インスタレーション、映像作家。1967年ワルシャワ生まれ。1988年から93年までワルシャワ美術アカデミー彫刻科のグジェゴシュ・コヴァルスキの元で学ぶ。家族や近隣住民と行うパフォーマンス《コモンタスク》や、ワルシャワの身体・精神障害者グループのノヴォリビエとの共同作業などでも知られ、ジミェフスキと共に共同体への問題提起となるようなワークショップなどを実施。身近な世界から想を得つつ無意識へとつながる想像力の飛翔を見せる。

アルトゥル・ジミェフスキ Artur Żmijewski

映像、写真、インスタレーション作家。1966年ワルシャワ生まれ。1990年から95年までワルシャワ美術アカデミー彫刻科でグジェゴシュ・コヴァルスキの元で学ぶ。応用社会芸術宣言を発表し、社会問題と密接に関わりながら制作を行う。ポーランドの政治・社会に関する出版を手がけるクリティカ・ポリティチュナのアート・ディレクター。

ワークショップ参加者

チャンチ（オル太）、西山裕希子、丹羽良徳、増本泰斗、松田壮統、水無瀬翔



日本の伝統に敬意を払いつつ、ワークショップを進めていきたい、と言う2人は、京都に到着するやいなや、日本の伝統的な物事を学び始めました。書道、いけばな、茶道、日本画、能、日本舞踊、作庭、神社への参拝、座禅、そして舞踏…。まずは自分の手を動かして、新しく出会ったものと向き合おうとする好奇心旺盛なバヴェウ、先生のお手本やバヴェウの「実践」を映像に撮ってばかりのアルトゥル。凸凹だけれど不思議に息のあった2人に振り回されてばかりの夏の始まりでした。

ワークショップは「非物質的行為（immaterial activities）」と「物質的行為（material activities）」による対話の連続で成り立っていました。まずはバヴェウとアルトゥルが短い映像で問いかけ、翌日に日本側の参加者が映像でそれに答え、またその翌日はバヴェウとアルトゥルが…という「非物質的行為」のやりとりから始まり、そのあとに「物質的行為」のパートにゆるやかに流れていく、というのが毎日のローテーションでした。最初の「物質的行為」は、ワークショップのユニフォームとな

るおそろいの作業衣を渡し、みんながそれを着たところでもむろに2人が参加者を竹に紐で縛り付けることから始まりました。2人から貰っていた「必要なものリスト」の一つ一つの道具が、まさかのように使うのだったとは！と思う方法で用いられていきます。最初は起こることを観察していた参加者も、次第に「行為」で反応し始めました。そうして「フリースタイル」の対話の火蓋は落とされました。

時には和やかに、そして時には大事件、とこの対話の日々は続きました。芸術だけではなく、自然、歴史、社会、モラルなどさまざまな問題について、根底から考えさせられる毎日。何かが起こるたびに終電を逃して始発を待つ、といった具合に、それぞれの生活そのものがワークショップに侵食されていきました。それでも誰も逃げ出すことなく、お互いに向き合い続けたのでした。



そしてワークショップの最終日、台風の影響で土砂災害が懸念される中、私たちは夜の大字山へ向かいました。はじめは乗り気でなかったアルトゥルも、「ゴーイング・トゥ・『ダイ』』というフレーズに動かされ、豪雨でぬかるんだ山道を進んで行ったのです。

こうして10日間のワークショップは終わり、参加者はみな、元の生活に戻って行きました。京都滞在の最後の日、バヴェウとアルトゥルは、毎晩夜中や早朝に散歩に出てはそこに行っ



いたという、お気に入りのベンチのある場所に連れて行ってくれました。ワークショップは素晴らしいものだった。いずれこの京都で「真のアカデミー」を設立したい。そのように2人は語りました。

後日、参加者にそのエピソードを話したところ、いつしか「真のアカデミー」のプレスクールを作ることを成果発表としよう、という流れになっていました。

どのような断片を集めたとしても、私たちが体験した、忘れられないあの夏のワークショップを再現することはできないでしょう。けれども、何を考えたのか、ということは「真のアカデミー」で表すことができるかもしれません。そしてそれは変容するものであっても構わないし、むしろそうあるべきものなのです。

EXHIBITION

ARTIST WORKSHOP @KCUA 成果発表展

「House of Day, House of Night (昼の家、夜の家)」

2016年1月9日(土)～2月7日(日)

講師2人と参加者による作品展示に加え、「真のアカデミー」の名の下に新しい教育機関のあり方を模索する実験を行う。会期中の週末ごとに「講義・演習」を実施予定。

3. DAY 1 at Guido's studio — グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ



@KCUA では、2016 年 2 月にオランダ人アーティスト、グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェの映像作品の展示・インスタレーションに加え、その表現手法についての、レクチャー形式ワークショップを開催します。今回、それらのリサーチとミーティングのために、グイドさんのフィンランドのアトリエを訪問しました。展覧会の方向性や展示作品の確認、同時に出版予定のカタログについての打合せなど、決めることが盛り沢山のスタジオビジットでした。

グイドさんのアトリエは、ヘルシンキ・ヴァンター国際空港から車で約 2 時間半のところにあるヤムサという町の外れにありました。空港からレンタカーで行ったので、いろいろトラブルがあって結局 4 時間半も掛かってしまい、予定を大きく遅れて到着しました。グイドさんもパートナーのヨハンナさんも相当心配していたようで、無事到着した時の 2 人のほっとした表情が印象的でした。

安心してみんなお腹が減ったのか、到着してすぐに夕食になりました。この日馳走になったメニューは、家の周りの森で採れたキノコのスープと自家製パンと西瓜のサラダでした。とても美味しかったです。その森ではキノコとブルーベリーが「死ぬほど採れる」そうです。

少し休んでから、食後にグイドさんと 2 人でジョギングに出かけました。僕は趣味でジョギングをしているので、それを話した時に「フィンランドに来たら一緒に走ろう！」となっていたので早速出かけることになったのです。グイドさんは年に 4-5 回フルマラソン、その他にもトライアスロンや 100km のウルトラマラソンを走るアスリート系アーティストです。そうした自身のフィジカルティーツやスポーツはグイドさんの作品の重要な要素になっています。2012 年制作の代表作である《第 14 番「郷愁」》という映像作品は、3 部から構成されるクラシッ

12



水泳、自転車、ランの 3 部構成）を当てはめ、フレデリック・ショパンのためのレクイエムを作詞作曲し、それに合わせてショパンの故郷であるポーランドのワルシャワから墓地のあるフランス・パリまでの 1700km 以上を踏破するという内容の長編映像作品です。

1 時間弱くらいのゆったりしたペースで 11km ほど走りました。走っている間は、展覧会のことやこれから制作する新作のことなどを話しました。この時期のフィンランドは白夜なので、夜は更けません。沈まない太陽と白い大きな月を森の向こう側に眺めながら、「フィンランドではこんな感じで、リラックスして対話を続けるのがいいな」となんとなく思いました。

結局、1 週間程の滞在中は、ジョギング、湖で水泳、トライアスロン（僕は同行のみ）、庭の手入れ、家のペンキ塗り、新作の撮影セットの製作、料理、キノコ狩りなど、一日中ずっと共同作業をしながら、フランクに打合せやインタビューをしまし

13

Text: Hirokazu TOKUYAMA

た。お互いの芸術観やもっと大きなヴィジョン、プライベートなど、想定していたものよりも深い内容になりました。展覧会の方向性・内容もしっかり決まりました。その間に話したことは 2016 年 2 月の展覧会とカタログに活かされることになりま

Text: Hirokazu TOKUYAMA

EXHIBITION
グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ個展「killing time | 無為の境地」
2016 年 2 月 20 日（土）- 3 月 21 日（月・祝）
グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ Guido van der Werve
1977 年生まれ。ヘリット・リートフェルト・アカデミー卒業、ライクスアカデミー修了（アムステルダム）。幼少よりクラシック音楽を学び、大学では文学と工学を学んだ後、美術を修める。主に映像作品を制作し、近年は作品の楽曲は自身の作詞作曲によるものである。音楽やスポーツ等の重層的な要素を含む、エンターテインメント性の高い映像作品は、芸術の専門的知識がない観客にも強く訴えかけることができる直感的な内容を目指しているといえる。主な個展に、アムステルダム市立美術館、ハーレン美術館（オランダ）、ニューヨーク近代美術館（アメリカ）、ユタ現代美術館（ソルトレイクシティ、米国）がある。主なコレクションは、アムステルダム市立美術館、ハーレン美術館（オランダ）、Goetz Sammlung 美術館（ミュンヘン）、ニューヨーク近代美術館、ハーシュホーン博物館（ワシントン DC）など。

みなも
「月が水面にゆれるとき」
(2015.6.27-2015.8.2 開催)



右上から時計周りに：中村牧子、和田真由子、曾谷朝絵、木藤純子

Photo: Takeru KORODA

芸術大学に在籍する女子学生の割合は、いま、どんどん増加しています。(京都市立芸術大学では、なんと約9割!)しかし、女性のアーティストが顕著に増加しているわけではありません。たとえば、世界中の多くの展示施設において、展覧会で取り上げられる女性作家の数は、男性に比べ、依然として明らかに少ないのです。

この現状に対して、何かアクションを起こすことができないものか、と考えてきました。とはいえ、@KCUAのような小さなギャラリーにおける企画がそれほど大きな影響力を持つわけがなく、また、たった一度の展覧会でこの大きな問題を解決できるわけではありません。しかし、一石を投じてみるのならできるかもしれません。そのような気持ちから、本企画は始まりました。投げ入れられた石が静かな水面をゆらし、それをきっかけに今まで見えなかった何かを発見する。「月が水面にゆれるとき」のタイトルには、そのような意味も込められています。また、展覧会を実施するだけでなく、〈芸術大学で学んだもの＝「アート」〉をキーワードとして、さまざまな職業に従事する芸術大学の卒業生たちによるアンケート内容の展示や、多様なイベントなどを通して、彼女たちの「いま」を紹介しました。問題意識のさらなる発展と、未来への希望を込めて、イベントのアーカイブも含めた、展覧会カタログ兼報告書を作成中です！(2016年刊行予定)

藤田瑞穂(本展企画／京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA 学芸員)



1 オープニング・イベント：

ギャラリートーク+レセプション
出展作家によるギャラリートーク後、「食」の分野で活躍する京都市立芸術大学卒業生(みず色クラブ、カヌレ)がケータリングを提供するレセプションパーティーを行いました。

2 中村牧子+渡里久美子(ファッションデザイナー／migh-T BY KUMIKO WATARI)
京都とロンドンで学び現在はドイツで陶芸家として活躍する出展作家の中村牧子と、京都市立芸術大学を卒業後渡英し、ロンドンでmigh-T BY KUMIKO WATARIを立ち上げたデザイナーの渡里久美子による対談。当日はmigh-Tのポップアップショップもオープン。

3 トークイベント

「芸大卒女子のお仕事ミーティング」
「アーティスト」以外の職業を選択した京都市立芸術大学の卒業生によるトークイベント。
登壇者：片岡真純(宮内庁正倉院事務所 保存課 整理室員)、広山幸江(株式会社リーフ・パブリケーションズ 編集製作局 編集製作部 ディレクター)、西谷枝里子(フリーランスアート広報)
(司会：とんぼせんせい(イラストレーター))

4 和田真由子+建昌哲(詩人・美術評論家)

本展出展作家の和田真由子と、前・京都市立芸術大学学長で詩人・美術評論家の建昌哲による美術、文学、詩をテーマとした対談を実施。

● 木藤純子展示空間内パフォーマンス

海の日、そして人類が初めて月面に降り立ったと言われている7月20日、日暮れ時から日没まで、1日限りのパフォーマンスを実施。山崎昭典(ギタリスト)が「海のエチュード」ほか、木藤純子の展示空間に合わせて演奏。

5 トークイベント「アートと子育て」

アーティストや美術関係者による子育てにまつわる座談会。
登壇者：東明(アーティスト)、フジタ(アーティスト)、西尾咲子(京都芸術センターアートコーディネーター)
(司会：小山田徹(美術作家／本学美術学部教授))

● クロージング・イベント：

山根明季子パフォーマンス
曾谷朝絵展示空間にて、山根明季子(作曲家)によるパフォーマンスを実施。

6 京都市立芸術大学卒業生アンケート

さまざまな分野で活躍する京都市立芸術大学の卒業生にアンケートを実施。Gallery Aにて回答内容を表示。

ア ク ア SCHEDULE @KCUA [2015.5-2016.3]

5月 MAY.

5/16 (土) - 6/21 (日)
「マテリアライジング展Ⅲ
情報と物質とそのあいだ」

近年高まりを見せているデジタルファブリケーションをめぐる美術、デザインの可能性を探る展覧会の第3弾。ポストデジタル時代における人間の創造性のゆくえに迫る表現を紹介。



6/27 (土) - 8/2 (日)
「月が水面にゆれるとき」

アートと女性をめぐるの現状と将来について考えるためのプロジェクト。木藤純子・曾谷朝絵・中村牧子・和田真由子による展示と、アートとキャリアデザインにまつわるイベントなどを実施。

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

8/6 (木) - 8/23 (日)
鳥丸由美個展
「フェーシング・ヒストリーズ」
8/8 (土) - 8/23 (日)
山／完全版のいきいきセンター

8/29 (土) - 9/6 (日)
「未知の標本」
8/27 (木) - 9/6 (日)
京都市立芸術大学 芸術資料館収蔵品展
「ARTであしあと6
図案科卒業・修了作品 衣によそおう」



9/12 (土) - 9/23 (水・祝)
サイレントアクア 2015

東日本大震災の復興に関わる活動をしている団体等を広く支援することを主な目的としたチャリティーオークション。本年度より新たに立体作品の出品を受け付け、より多彩な内容で実施。

9/10 (木) - 9/27 (日)
「つながる糸 ひろがる布」
金沢美術工芸大学／京都市立芸術大学／
東京藝術大学染織専攻学生選抜展

8/29 (土) - 9/6 (日)
「未知の標本」

10月 OCT.

9/26 (土) - 10/4 (日)
Nuit Blanche Kyoto
2015 @KCUA

10/10 (土) - 11/15 (日)
タデウシュ・カントル生誕 100 周年記念事業
「死の劇場ーカントルへのオマージュ」

演劇のみならず奇才の美術家でもあったタデウシュ・カントル。その生誕 100 年を記念して、カントルの貴重な作品資料と、国内外のアーティスト 7 名 1 組による展覧会を開催。

11月 NOV.



11/21 (土) - 12/6 (日)
「岡崎和郎／大西伸明 Born Twice」
大学美術館を活用した美術工芸分野
新人アーティスト育成プロジェクト谷穹個展「罫」

12月 DEC.



12/10 (木) - 12/21 (月)
京都市立芸術大学第 26 回留学生展

12/10 (木) - 12/25 (金)
伊藤早樹子個展「カメのしじみ」

1月 JAN.

ARTIST WORKSHOP
@KCUA 成果発表展
1/9 (土) - 2/7 (日)
パヴェウ・アルトハメル+アルトゥル・ジミェフスキ
「House of Day, House of Night (昼の家、夜の家)」

1/16 (土) - 2/7 (日)
ネリー・ソニエ「Feather」
ネリー・ソニエ、パヴェウ・アルトハメル、アルトゥル・ジミェフスキを講師に迎えて行ったアーティスト・ワークショップの成果発表となる作品を展示。

2月 FEB.

2/20 (土) - 3/21 (月・祝)
グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ個展
「Killing time | 無為の境地」

音楽やスポーツ等の重層的な要素を含む、エンターテインメント性の高い映像作品を手がけ、海外で高い評価を受けているグイド・ヴァン・デル・ウェルヴェの日本初個展を開催。

奥村雄樹個展「な」

オランダとベルギーにて制作・活動を行う日本人作家、奥村雄樹の京都初個展。

3月 MAR.

4/16 (土) - 5/29 (日)
京都市立芸術大学移転プレ事業
「still moving-on the terrace」

3/26 (土) - 4/3 (日)
京都市立芸術大学移転支援事業
「京都芸大同窓会アートフェア 2016」



作品のプレゼンテーション？

鷲田清一（哲学者、京都市立芸術大学学長）

プレゼンテーションというものを、わたしはあまり信用していない。もちろん、心ならずもそれが必要とされる場面もあることはある。というか、営業でも事業提案でも、ヒアリングや面接でも、明快なプレゼンテーションというものが昨今、ますます求められるようになっていく。けれどもことアートにおいては、何を語るのか、どう語るのかが、上の場面で求められるものとはずいぶん異なるはずだと思っている。

「芸術」は、作品として、あるいはパフォーマンスとして、すでに提示されてある。だからそれについて説明を加えるのは、あえていえばプレゼンテーション、つまり再提示

もしくは代理提示であって、プレゼンテーションなのではない。それは出来上がったものについて事後的に語るものであって、アートの制作プロセスそのものを言葉でともに担うものではない。

じぶんが創った作品についてプレゼンテーションを試みるたびに、たぶんだれもがまずぶち当たるのは、うまい言葉が見つからない、どんな言葉を口にしてもきちんと言いつけられない……といったもどかしさだろう。いや、そもそも芸術作品について語るというのは、ある言語から別の言語への翻訳ではなく、非言語から言語への翻訳なのだから、その語りは不完全な再提示、つまりは言葉足らずになるほかない。

だから、ちょっと逆説的な言い方になるが、言葉によるプレゼンテーションは、言葉が足りない、うまく言語にできないというもどかしさ、つまりは口ごもりのなかでこそ、より精密になされるはずである。すらすら再現できるのなら、はじめから言語でそれを表現すればいいだけのことだ。では、芸術にプレゼンテーションは不要なのだろうか。よくてせいぜい付け足しにすぎないのだろうか。

芸術はひとの感性や想像力を豊かにするものだ、よくいわれる。言葉にならないものを表現するともいわれる。

だが、「悲しみ」という語が悲しみの感情に似ていないように、言葉もまたわたしたちのもつれた思いや体験に新たな形を与えるものである。そういう意味では、言葉もまた表現と理解の触媒として大事なものである。が、言葉が触媒としてはたらくというのは、言葉にも言葉というかたちをとって立ち上がる、その瞬間があるということである。そう、意味が、形が、生まれる瞬間が。

作品の制作ではなく、いったん仕上がった作品を人びとのあいだでさらに生成させるためにこそ、言葉はある。作品のなかに潜在している意味を、こんどは他者たちに向けて語り、問いかけ、他者たちへと架橋してゆくこと、いいかえれば他者たちとのあいだでそれをさらに生成させること、そこに芸術におけるプレゼンテーションの意義はあるのではないか。

何十年ぶりに偶然再会した人を、はてだれだったかと訝しげに見つめているさなか、「あっ、顔が出てきた」と叫び、懐かしむ瞬間があるように、あるいは逆に、家族や友人といった《同じ顔の中に日ごと見知らぬものが現われる》(ジャコモメッティ)のを見て震えることがあるように、自作品についての他者に向けて語るなかにもそのようにある未知の意味が生成しだす瞬間がある。そこから作品の別

の〈顔〉、別の〈しるし〉が立ち現われる瞬間が。

だから、芸術制作に取り組む人は口下手でいいとおもう。あえて口下手がいいとまでは言わないにしても、他者の言葉をそこから引き出すには言い定んでいるくらいのほうがいいとおもう。

むかし、宮下順子という女優さんについてこう書いたことがある――

《あまたいる女優のなかでも、このひとほど顔とからだをなめらかに続けているひとは少ない。このひとの顔はからだを引きずっている。あるいは、もてあましたからだのもてあました分が、顔になっている。》

そういう切っても切れない関係が、芸術表現とそれを再提示する言葉とのあいだにあればいいとおもう。

鷲田清一

1949年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。関西大学教授、大阪大学大学院教授、大阪大学総長を経て、大谷大学教授、せんだいメディアテーク館長。2015年度より京都市立芸術大学学長。専門は哲学・倫理学。哲学の視点から社会が抱える諸問題に取り組む臨床哲学を提唱。『「聴く」ことの力』『モードの迷宮』など著書多数。

STUDIO VISIT @KCUA



20

vol.1

@KCUA が様々なアーティストのスタジオを訪問し、スタジオの様子や今気になっている事をお聞きするコーナー「STUDIO VISIT @KCUA」。記念すべき第1回目は、京都市立芸術大学在学中にユニットをスタートし、いまや結成20年を超えるカワイオカムラさん。京都・亀岡にある彼らのスタジオを尋ね、作品制作の苦勞、こだわり、今の制作環境にいたるまでをお聞きしました。

21

カワイオカムラ | 亀岡スタジオ

Interview: 編集部

アナログとデジタルの狭間で

——カワイオカムラ作品はどのように作りだされているのでしょうか。作品を作り始めた頃の話から聞かせていただけますか？

カワイ：僕らが映像を作り始めた頃は完全なアナログ編集でした。8mmビデオやS-VHSのビデオデッキを4台くらいとサンプラーやマルチトラックレコーダーといったオーディオ機材を並べて。それはもう手が4本ないと出来ない世界で。

オカムラ：タイムカウンターなんかもビデオデッキによって個体差があって、微妙に誤差があるんで、それも計算して、2人で4本の手を交差させながら再生と録画ボタンを絶妙なタイミングで押すんです。

カワイ：当時は自力で買えて、映像の編集ができる機材としては、ハイエンドの家庭用ビデオデッキを使うのが当時の最善の方法だったんです。そういえば、京都工芸繊維大学（以下、「工繊大」）は Mac 環境を整えるのが早かつ

たので大学院のころは友人を頼って、よくお世話になりました。

オカムラ：当時はグルーヴィジョンズの伊藤弘さんが工繊大の教員で、ピチカート・ファイヴのビデオ編集なんかもされていたりね。

カワイ：時代も違いますが、自分たちのような潜りの京芸生にも、挨拶すると気持ちよく返してくださるような大らかさでした。

オカムラ：アナログ編集は1回失敗するとそれだけ画質が落ちるから、ライブ感というか、緊張感があります。

カワイ：ライブ的な楽しさもあつたし、アナログなやり方だったからこそ、色んな味のあるものができた、と、今では思います。ダビングしたらただけ撮影素材や原画の細部は劣化してしまう。そうして生じるノイズに当時は本当にストレスを感じました。一番イヤだったのは、ダビングするごとに、画面の片端に数ミリずつ黒の縦オビが広がってくること。3回4回とダビングを重ねると、14イ

ンチのモニター画面で、横に1cm 幅ぐらいのオビができてしまうんです。《ホーリーアンドチープ》という伝説の漫才師を題材にした作品では、カットごとにダビングの回数が違うので、あるカットでは問題ないけど、バストアップに切り替わったら黒いオビが出て、カットが変わるとまた消えるというような事もおきる。こんなことも考えようによっては、このデジタル時代には発現しにくい豊かな謎かけになっている、と言えなくもない。

生の質感を求めて

カワイ：Mac による編集・制作に移行して、ノイズのストレスからは解放たれたんですが、ノイズが無さ過ぎる、デジタル映像の生っぽい質感が気になるようになって、今度は一生懸命にノイズを入れてみたり、再現するようになった。テクノロジーが発達した今だからこそ、アナログの頃の、4 本の手を交差して「せーの」みたいなライブ感や、それに代わるのは何かという問いは呪文みたいにずっと残っています。

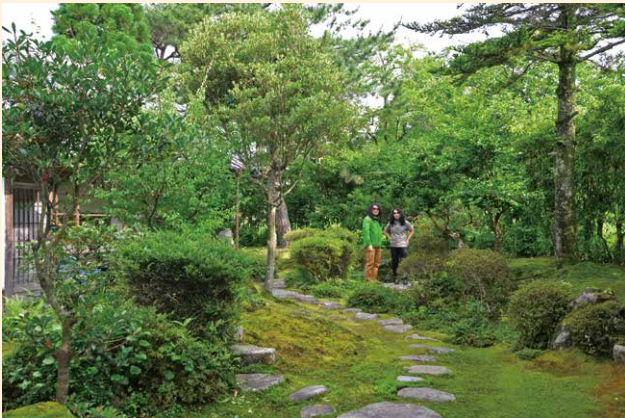
オカムラ：元々、僕も絵を描いてたし、彼も彫刻で物を扱ってたんで、作品を作る時に、明らかに映像では再現されないだろうというところまで作りこんでしまう。
カワイ：たとえば、キャラクターの動作のリズムや登場のタイミング、作品全体の時間の流れを作るときも、デジタル特有のべたんとした均質な感じにならないように、どうずらしていくか。誰も気づかないようなところをいろいろ試して、やっと作品固有のテンポが見つかり、だんだんと僕らの手を離れて作品が動き出す、というような感じです。

亀岡スタジオに来るときは100%カワイオカムラ

——卒業後は、すぐにスタジオを整えられたんですか？

カワイ：大学を出てすぐの頃はカワイオカムラと、同級生もう1人との3人で鷹峯にスタジオを構えました。隣の部屋には、きむらとしろうじんじん、下の階にはダムタイプの倉庫があって、小山田さんも時々作業をされ

ていた。卒業前からその場所を借り、6 年間そこで制作しましたね。
オカムラ：大家さんは周辺一帯で林業を営んでいて、アトリエにもなるような倉庫などをいくつも持っていて。僕らの借りていた建物と別の物件にも同期の友人がいました。今でも京芸関係の人がどこかに入ってるんじゃないかな。
カワイ：2001 年にその場所をいっしょに借りていた友人がシェアから抜けることになったのをきっかけに、岡崎の住宅密集地にあるごく普通の民家にアトリエを引越しました。
オカムラ：大家さんは、川合君のお姉さんの知り合いで、ご自身も陶芸や絵を趣味とされていたこともあって、僕らのような仕事にも理解のある方でした。自由に改装してよいということだったので、とりあえず天井をパーンとぶち抜いたら、構造上、一番大事な真ん中の梁がバキッと折れてて。そこから大改修が始まり、一年くらい改修してたかな。そこまで時間もお金もかけるつもりはなかったんですけどね。2009 年以降は造形大にいる時間が長くなったので、京都造形芸術大学（以



下、「造形大」の方がスタジオみたいになっているような感じがですね。

——亀岡のスタジオと造形大を使い分けておられるんですね。

カワイ：制作のプロセスが、作品ごとにいろいろちがうんですが、亀岡のスタジオは、プロジェクトが進んで、集中して構想しようとか、撮影というより編集する場所です。情報を遮断することができるので、亀岡スタジオは頭のチャンネルが完全に切り替わる感じが

ある。この部屋が編集を主とした作業室で、他の部屋には初期の頃の造形作品も置いています。
オカムラ：ここで作業する時は、かなり長い時間を過ごします。今になって思えば、卒業してすぐは、京芸の制作室の延長みたいな感じで、作業だけでなく、居場所、人が出入りする場所が必要だったんですけど、だんだんそこからもっと身軽にしていきたい、となって、今のようなスタイルになりました。

続ける、繋がる

カワイ：卒業して3 年制作を続けられるかというのはよく言われる話で、1、2 年は勢いではがんばれるんだけど、そこから先は現実的な問題が際立ってくる。僕も学生の頃、どうやって続けて、どうやって辞めていくのかということには興味がありました。その線はどこら辺にあるんだろうって。
僕らの頃は、ダムタイプのメンバーやさらに上の人から学生までが集まって朝まで飲むみたいなイベントが時々あって、ちょっと

上の人たちとも話せる機会があったのは面白かったかな。どうしたら活動を続けられるのか、ストレートに聞いてみたりしていました。
オカムラ：東京藝大やいろんな大学の人とそういう場所で知り合うこともできましたね。縦横につながることができる場所がたくさんあったように思います。
カワイ：今は、@KCUA がそんな感じになってきてるんですね？ きつとね。

カワイオカムラ Kawai + Okamura

岡村寛生と川合匠は1968 年生まれ、1994 年京都府立芸術大学美術研究科修了。油画専攻の岡村と、彫刻専攻の川合により在学中の1993 年に結成されたカワイオカムラは、絵画、立体、映像等を複合させた領域横断的な表現に始まり、現在はアニメーション映像作品を国内外で発表している。近年の代表作である短編アニメーション《COLUMBOS》はアルスエレクトロニカ2014 に選ばれたほか、世界各地の映画祭で上映されている。現在は2 人共に京都造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科准教授を勤める。2016 年12 月に@KCUA にて個展を開催予定。

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

住所：京都市中京区押小路町 238-1

アクセス：地下鉄「二条城前」駅（2番出口）南東へ徒歩約3分。

市バス：101系統「バス停下産すく」。

TEL: 075-251-1600

<http://gallery.kcuu.ac.jp/>

編集：高谷枝里子（リレーリレー）、藤田真純

発行：2016年1月15日

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA ©2016

